

たんにしょう 『歎異抄』のおはなし⑥ 第四条

前回は、有名な「悪人正機」に関する第三条についてお話ししました。

悪人というのは煩惱をそなえた私たち衆生のことであり、ありのままの罪深い自分に気づき、自分のはからいではなく、自力の心をひるがえして他力をたのむことができるようになったときに、私たちは救われるということをお話ししました。

今回は第四条で、二つの慈悲じひについてのお話です。

この第四条では、慈悲には聖道門しょうどうもんの慈悲と浄土門じょうどもんの慈悲との二通りあることが述べられています。聖道門の慈悲は「末通すえとおらない」、すなわち首尾一貫しないものだということです。

「末通」とは、終わりまで筋を通してやり遂げること、首尾一貫していることを言います。私たちのような無力な人間にとって、自力聖道門の慈悲というのは、最後までやり遂げて実現するのがとても難しいのです。

浄土門の慈悲のみが末通りたる慈悲、すなわち首尾一貫した慈悲心で、この第四条の最後の方に「末通りたる大慈悲心」という言葉が出てきます。

他力浄土門の慈悲、すなわち阿弥陀仏の救いを疑いなく信じて念仏することだけが、無力な私たちに残された道であることが、この第四条では記されています。

親鸞聖人しんらんしょうにんは、九歳で出家した後二十年間、聖道門ひえいざんの比叡山てんだいしゅうえんりやくじの天台宗延暦寺で学問と修行に励まれましたが、覚りを得ることができませんでした。

行き詰まった挙句あげくに山を下りて京都市内の六角堂さんろうに参籠して、夢告によって京都の吉水におられた法然上人のもとで他力浄土門に入られました。

前回「悪人正機」の時に、親鸞聖人は、ご自身が罪悪深重の身であるという深い自覚を持っておられたということをお話ししましたが、そのような罪深い存在であっても、私たちを超えた仏様の真心が、私たちを救ってくださるのです。

「慈悲じひに聖道しょうどう・浄土じょうどのかはりめあり。」

「慈悲」の「慈」は利益りやくと安楽あんらくをもたらそうと望むいつくしみのことで、インドのサンスクリット語では maitrī (マイトリー) と言います。

「悲」とは他者の苦しみに同情し、これを救済しようとする思いやりで、不利益と苦しみを除こう

とすることです。サンスクリット語で **karuṇā** (カルナー) と言います。

この「慈」と「悲」の二つを合わせて、「^{ほつ}く^よらく」(苦惱を取り除き楽しみを与える)とも言われます。

相手の苦しみを除いて安心を与え、救い取ってあげる、そのようなはたらきが慈悲であるとされ、これはある意味、宗教の最大の目的であるともいえます。

「聖道」というのは聖道門のことです。「聖道門」の「門」というのは教えという意味です。聖道門は^{せいじや}聖者の道で、自分の力で修行を積んで、この世において覚りを開くことをめざす教えです。自力の厳しい修行によって、この世で生きている間に仏になって自らを完成し、他の人々を救うという考えに立っています。

「浄土」は「浄土門」のことで、「聖道門」に対比されます。こちらは凡夫向きの教えで、阿弥陀仏の本願力、すなわちすべての人を必ず救うというお誓いにおまかせして、浄土に往生して覚りを開く教えです。仏様のお力によって自分の思うことを成し遂げさせていただき、仏様におまかせする教えです。すべての生きとし生けるものを救い取るお仕事を、人間が最初から最後まで自分の力で成し遂げるのではなく、阿弥陀仏の本願を疑いなく信じて念仏を申し、仏様にすっかりおまかせすることによって救い取っていただく教えです。

「かはりめ」というのは、違っているところ、相違点という意味です。現代語訳は、以下の通りになります。

(現代語訳)

〈慈悲について、聖道門と浄土門とでは教えに違いがあります。〉

聖道門の教えは、自らの力による修行によって仏の智慧や教えをいただいて、自分が他の人を救うという、自己に主体の中心がおかれます。

浄土門の教えは、問題をこの世の尺度によって自分で解決しようとする教えではなく、仏様のお心をいただいて、仏様に解決をおまかせするということを説きます。

聖道門の慈悲というのは、^{くう}空(物事は縁起(一切のものは様々な因や縁によって生じるという考え)により成り立っており、永遠不変の固定した実態はない)の思想を實踐して菩薩道の完成をめざし、慈悲の行ない、利他行(他を利する行)を實踐することが必要とされました。菩薩とは、悟りを求

めて修行する人のことで、菩薩道は菩薩の修行の道であり、自利・利他の行を成し遂げて覺りに至る道のことです。

しかし煩惱に満ちた愚かな私たちには、これはなかなか難しく簡単なことではありません。

自力聖道門の立場による慈悲の実践は、おのずから限界があります。

ですから聖道門の門戸は狭く、一部の優れた人しか覺りを開くことができません。

しかし浄土門は、すべての人を救うという阿弥陀仏の本願を信じてお念仏を称えることによってすべての凡夫が救われて、あの世において必ず仏の覺りを開くことができる教えです。

以前「正信偈」についてお話した時にも説明いたしましたが、七高僧しちこうそうの第四番目、中国の道綽どうしゃく禪師ぜんじは仏教を二つに分けて、聖道門と浄土門の二つとされました。

そして末法まっぽうの五濁ごじよくの世の中では、聖道門の教えでは救われないので、私たちは浄土門に入るべきであるとして、浄土門をすすめられたのです。

末法というのは「正像末しょうざうまつ」の三つの時代のひとつです。

正法しょうぼうの時代というのは、お釈迦様が亡くなってしばらくの間、教えが正しく遺りのこ、それを忠実に
行う人がいて、覺りを開く人がいる、仏滅後千年または五百年の間とされています。

この後、「像法ざうぼう」の時代となり、教えは遺りそれを行ずる人もいますが、覺る人がいなくなる時代
で、千年の間続くと言われます。

そして像法の後、教えは遺ってもそれを行なう者がいなくなり、覺る者もいなくなる時代を「末法まっぽう」
といい、一万年続くとされました。

「末法」の後には、教えさえ遺らない「法滅ほうめつ」の時代がやってくると言われます。

日本では、平安時代の1052年が「末法」の始まりとされましたが、中国では道綽どうしゃく禪師が562年にお生まれになる直前の552年が「末法」元年と言われました。

◎聖道門の慈悲とは？

「聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。」

「もの」とは、すべての生きとし生けるもののことです。

「あはれみ」とは、不憫に思う、同情する、気の毒に思う、慈悲の心かける、という意味です。

「かなしみ」というのは、いとしく思う、可愛いと思う、いとおしむことです。

「はぐくむ」とは、養い育てることです。

現代語訳は以下の通りです。

(現代語訳)

〈聖道門の慈悲というのは、すべての生きとし生けるものをあわれみ、いとおしみ、はぐくむことです。〉

「しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。」

「ありがたし」とは、まれである、めったにない、むずかしいという意味です。

現在普通に使われる「ありがたい」という意味ではなく、「あることが難しい」ということです。

現代語訳は以下の通りです。

(現代語訳)

〈しかしながら、(聖道門の慈悲では)思うとおりに救いとげるとは、きわめて難しいことです。〉

自力聖道門の慈悲というのは、立派な人が覚りを目指すために慈悲行を行なうことですが、聖道門の慈悲行というのはある意味すばらしくて理想的なものであり、それを実現することが、聖道門の教えです。

しかしながら、限られた能力しかもたない人間にとっては、どんなに一生懸命に慈悲行を行なっても、思い通りに助けることには限界があり、慈悲行を成し遂げるのは極めて難しいことがわかってきます。

ですからわたしたちのような無力な人間にとっては、その実現はとても不可能だというわけです。

◎浄土の慈悲とは？

「浄土の慈悲といふは、念仏して、いそぎ仏になりて、大慈大悲心だいじだいひしんをもて、おもふがごとく衆生しゅじょうを利益するをいふべきなり。」

「いそぎ」というのは、まずもって、速やかに、すべてのものに優先してという意味です。

「大慈大悲」とは、阿弥陀仏の、広大で深いあわれみ、悲しみのことです。

「衆生」は、いのちあるもの、生きとし生けるもののことです。

「利益する」というのは、仏の力によって他人に恵みや福を与えること、救うことです。

現代語訳は、以下の通りです。

(現代語訳)

〈浄土門の慈悲というのは、念仏して速やかに仏になって、仏の大いなる慈悲心によって、思いのままにすべての生あるものを救うことをいうのです。〉

私たちのような愚かな凡夫は、念仏を称えることによってみずから仏となり、仏様の立場から他者を救うというのが、他力浄土門の慈悲だということです。

◎往相廻向と還相廻向とは？

この「念仏して、いそぎ仏になりて」ですが、お念仏を称えて浄土に往生して速やかに仏になることを、「^{おうそうえこう}往相廻向」と言います。

これはまた「^{じり}自利」（自分を利する）の行だともいわれます。

罪深く愚かな衆生が、自分の悪を自覚するがゆえに、すべてを弥陀の本願力に委ね、念仏をとнаえて浄土に往生して仏となることです。

「おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり」ですが、浄土に往生した者が再び^{しゃばせかい}娑婆世界に^{かえ}還ってきて、^{えん}縁のある人々を救うことを「^{げんそうえこう}還相廻向」と言います。

これは「^{りた}利他」（^{ぎょう}他を利する）の行だとされます。

この「^{おうそう}往相」と「^{げんそう}還相」は、どちらも阿弥陀仏の^{たりきえこう}他力廻向の働きによるものだと言います。

親鸞聖人は、この「^{おうそう}往相・^{げんそう}還相廻向」を重要視されており、『^{きょうぎょうしんしょう}教行信証』の冒頭や、^{わさん}和讃などにおいても、しばしばこの言葉が使われています。

「往生」が、この世での生が終わった後なのか、それとも生きている間のことなのかについては論議があります。

「往生」とは、この世の命が終わって他の世界に生まれることで、浄土教では阿弥陀仏の西方浄土に往き生まれることを言います。

一般的には「往生」は死後のこととされ、生きている間はあくまで「^{げんしょうしょうじょうしゅ}現生正定聚・^{じゅうふたいてん}住不退転」で、これはすなわち「この世で生きている間に往生が定まる」ということだとされています。

私たちは煩惱に満ちているので、たとえ信心を得ても、この世においてはあくまで「正定聚の位」につくのであり、生きている間に往生・成仏することはできないとされます。

親鸞聖人が書かれた『^{まつとうしやう}末燈鈔』には、次のような言葉があります。

「^{ぎょうにん}眞実信心の^{せつしゆふしや}行人は、^{しょうじょうしゅ}攝取不捨のゆえに^{くらい}正定聚の^{じゅう}位に住す。このゆえに^{りんじゅう}臨終をまつことなし。
^{らいごう}来迎をたのむことなし。信心のさだまるとき往生またさだまるなり、^{ぎしき}来迎の儀式を待たず。」

ここでは、信心の定まる時に往生もまた定まるので、臨終の際の来迎往生の儀式を待つことはない
と親鸞聖人は書かれました。

平安から鎌倉時代には、臨終の時に阿弥陀仏の仏像や仏画を往生人の枕元に据えて、その手から五
色の糸を臨終の人の手に握らせて、阿弥陀仏の来迎を待つ風習があり、これを来迎儀式と言いま
した。

しかし聖人は、この六年後に記された『一念多念文意』^{いちねんたねんもんい}において、「即得往生」^{そくとくおうじょう}について以下のよ
うにも述べておられます。

「真実信心^{しんじつしんじん}をうれば、即^{すなわ}ち無礙光仏^{むげこうぶつ}の御心^{おんこころ}のうちに攝取^{せつしゆ}して捨てたまはずなり。撰^{せん}はをさめたま
ふ、取^{しゆ}はむかへると申^{もう}すなり。をさめとりたまふ時^{とき}、即^{ときひ}ち時日^{ときひ}をも隔^{へだ}てず正定聚^{しょうじょうじゆ}の位^{くらい}につき
定^{さだ}まるを「往生^{おうじょう}を得^う」とはのたまへるなり。」

ですからここではさらに進んで、正定聚の位につくことを、往生を得ることだと書かれています。

「臨終往生」に対する「即得往生」という考え方がここでは強調され、他力の念仏者はこの世を生
きながらにして往生するということが明らかにされているようにも思われます。

親鸞聖人は85歳の晩年に至って、臨終往生ではなく即得往生を肯定する方向へと、ご自身の思索
を深められたとも考えられるのかもしれませんが。

晩年には、親鸞聖人は「念仏の人は弥勒に等しい」というようなことをあちこちに書いておられま
した。弥勒菩薩とは56億7千万年後にこの世に現れて、衆生を救済するという未来の仏様です。

また『歎異抄』第五条にも、次のような文章が見られます。

「ただ自力をすてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、(中略)まづ有縁を度すべきなりと」
〈自力にとらわれた思いを捨てて、速やかに浄土に往生してさとりを開いたなら、(中略)まず縁
のある人々を救うことができるのです。〉

この文も、言葉遣いは少し違いますが、さきほどの「念仏していそぎ仏になりて」と同じようなこ
とを言っているようにも思われます。

「還相廻向」は、このように、往生はこの世で自力を捨てて信心を得た後だと考えると、より理解
されやすいようにも思われるわけです。

ですから『歎異抄』第四条の「念仏して、いそぎ仏になりて」や『歎異抄』第五条の「ただ自力を

すてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば」は、「念仏して死に急ぐ」という意味ではなく、他力の念仏者は、信心が定まると生きながらにして往生を遂げて、この世で他者のために尽くすことができるようになるというようにも解釈できるのではないかとも思われます。

しかしこのあたりは微妙であり、やはりこの場合の「いそぎ仏になりて」や「いそぎ浄土のさとりをひらきなば」は、「正定聚」のことを言っていると解釈されるべきでしょう。

また『歎異抄』第九条には、以下のような記述もあります。

「なごり惜しく思へども、娑婆の縁つきて、力なくして終る時、かの土へは参るべきなり」
〈どれほど名残惜しいと思っても、この世の縁が尽きて、どうすることもできないで命を終えるとき、浄土に往生させていただくのです。〉

ここでは親鸞聖人は臨終往生の立場を取っておられ、浄土へ行くのはこの世での生が終わる時だと述べています。

いずれにしても、往生については、今でも議論があります。

親鸞聖人ご自身も、相手によってこの解釈を変えているようにも思われるわけで、あいまいです。しかし多くの学者や宗門においては、この世においてはあくまでも現生正定聚不退転げんしょうしょうじょうしゅふたいてん（この世において往生することが定まる）であり、往生・成仏はあの世において、とする解釈が主流です。

しかし浄土の慈悲というのは、浄土とつながりをもった慈悲が、時に生きた人の上にもあらわれることではないかとも思います。

親鸞聖人にとって、法然上人はまさに還相廻向ぼさつの菩薩のような人だったのではないのでしょうか。比叡山では、どうしても覚りを得ることができず苦しみ悩んでいた親鸞聖人は、法然上人に出会い、法然上人の説く他力念仏の教えによって救われたのです。

そして唯円にとっての親鸞聖人もまた同じように、還相廻向の人のような存在だったのではないのでしょうか。

心から本願を信じてお念仏するところから、人の上にも仏様のような暖かい慈悲のはたらきが生まれることが、時にあるように思われます。

あらゆるはからいを捨てて、すべてを阿弥陀如来におまかせするという気持ちから、そのようなことが可能になるのではないかと思います。

「今生こんじょうに、いかにいとをし、不便ふびんとおもふとも、存知ぞんちのごとくたすけがたければ、この慈悲始終しじゅう

なし。』

「今生」は、この世に生きている間ということです。

「いとをし」というのは、見ていてつらい、かわいそうだという意味です。

「不便」は気の毒なこと、かわいそうに思うことです。

「存知のごとく」とは、思うように、思い通りにという意味です。

「始終なし」は、終始一貫しない、ということです。

現代語訳は次の通りです。

(現代語訳)

〈この世で生きている間に、どれほどかわいそうだ、気の毒だと思っても、思いのままに救うことは困難なのですから、このような(聖道門の)慈悲は首尾一貫するものではありません。〉

人間の力は完璧ではなく限界がありますから、どんなに真面目に励んでも、途中で挫折したり放棄したりして終わってしまい、首尾一貫することは極めて少ないのです。

「しかれば、念仏うんぬんまうすのみぞ、すえとをりたる大慈悲心にてさふらふべきと、云々。」

「すえとをりたる」というのは、最後まで首尾一貫した、終りまで筋が通った、徹底したという意味です。

「云々」は、これまでの前の条にも出てきましたように、このように親鸞聖人は仰せになりましたという意味です。

現代語訳は以下の通りです。

(現代語訳)

〈ですから、ただ念仏を称えるということだけが、最後まで首尾一貫した大いなる慈悲の心なのです。このようにしょうにん聖人は仰せになりました。〉

無力な私たちは、阿弥陀仏の救いを信じて念仏すること以外に手立てがないというわけです。

今日はこれくらいにしたいと思います。

次回は11月23日の報恩講において、第五条を拝読したいと思います。

どうもありがとうございました。